

## 第 11 回千葉県サッカー医科学研究会 報告書

2021 年 3 月 10 日

医学委員 村松佑太

医学委員会は 2021 年 3 月 6 日(土) 第 11 回千葉県サッカー医科学研究会を開催した。

例年本会はサッカー医科学に関する一般演題と特別講演で構成し、会終了後にドクター・トレーナー・指導者の交流の場を設けていたが、今年はコロナ禍のため Web 開催での特別演題のみとした。

特別講演は、成田赤十字病院 感染症科 部長 馳亮太 先生に、演題名「スポーツ関係者のための新型コロナウイルス感染症対策アップデート」でご講演頂いた。

演者 馳亮太 先生、医学委員長 土屋敢 先生（開会の辞）、副委員長 山口智志 先生（閉会の辞）、座長（村松）の 4 名は TKP ガーデンシティ幕張に集まり会を中継した。なお本会は久光製薬株式会社に共催頂き、通信環境の設定などにご協力いただいた。

参加者（聴講者）は計 106 名。整形外科医などのドクター、トレーナー、そして河瀬専務理事をはじめ、2～4 種指導者、養護教諭など多くのサッカー関係者に参加して頂いた。

講演は新型コロナウイルス感染症の基本的な解説から現場でも活かせる具体的な対策、そしてワクチンの話まで、幅広くまたとても分かりやすい内容であった。

昨今のプロスポーツ競技では定期的な PCR 検査が行われていることが多く、あくまで検査の時点においては、陽性者はいない、という前提で競技は行われている。そのため競技中またはトレーニングの感染リスクに備えること以上に、選手の日常生活において一般的に言われているリスク（いわゆる 3 密）を避けるよう選手たちを啓蒙し、いかにしてその競技グループ内に陽性者を入れないかが重要である。スポーツ関連で発生するクラスターの多くにおいて、選手の会食や寮生活などが発生原因および拡大要因であることが疑われており、その考えの裏付けとなっている。

また、休むことが得てして怠けていることに捉われがちなスポーツ現場において、Jリーグのガイドラインにも記載されている、少しでも体調が悪ければ“休むことができる文化の醸成を”という考え方は、陽性者および濃厚接触者を競技グループ内に入れずにスポーツ活動を守るという意味では非常に意義のある概念で、馳先生もご講演の最後のまとめで改めてこの点について強調されていた。

講演では一貫して、感染症対策はなぜそのような対策をするのか理由を考えながら実践することが重要とされ、その感染症の特徴をよく知ったうえで合理的で現実的な対策をすることが求められるとお話されていた。例えば接触感染への対策においては、トレーニング器具の消毒を徹底的に行うよりも、我々が手指の衛生をしっかり守ることがより効果的で

あり、よく考えるとやらなくてもよい対策を我々はやっているかもしれない、馳先生のご講演は改めて現場活動での感染対策を見直すきっかけとなり、まだまだ収束の見えないコロナ禍において、スポーツ活動を促進するためのヒントを多く頂けた。



写真 1: 感染対策のため演者・座長らの席の間は手製の敷居が準備された。会場は換気され体調不良者もおらず皆マスク着用のため、これはやらなくてもよい対策だったかもしれない。



写真 2: 左から筆者(村松), 土屋 敢先生(医学委員会委員長), 馳 亮太先生(演者), 山口智志先生(医学委員会副委員長)。会終了後、馳先生のご指導のもと、喋らないことを約束に皆で撮影時のみマスクを外して写真を撮影した。